



対するシュラクルを透徹する者も居るのかも知れない。しかし、それにしても、イシカワの作品は、素朴に、美しいのだ。

美と芸術の乖離は1910年代、ヨーロッパのダダまで溯ることができる。否、徳川時代の過剰な装飾美や歪な真珠であるバロックも考察に入ると、実は美と芸術が共に道を歩んだことなど単なる幻想なのではないかという発想にまで結びついていく。それは極論だとしても、難解なコンセプチュアル・アートが蔓延する一方、他方で商品としての美術が1980年代以降に誕生したことを忘れてはならない。確かに美術品の売買は古来、行われてきた。しかし、80年代以降という現象は、美術が商業主義というよりもむしろ資本主義に完全に飲み込まれた状態を指し示す。

近代的な既存の美術が破壊され、現代美術はより自由な方向へ向かうはずが、破壊された権威の座には美術ではなく資本主義と商業主義は居座り、相変わらず権威は存在する。先端技術を誇示する映像、国策としての漫画、NYで認められたとされる作品、枚挙に遑はない。それらに共通する事項とは、オリジナルを消去し、複製やイメージのみが世界を巡回することにある。かつてW・ベンヤミンはオリジナルと共にアウラの消滅について語った。この言葉には、「オリジナル」という権威志向に対するアンチが含まれていると読み解くことが出来る。しかし言葉は一人歩きし、権威を伴いながら複製が蔓延するという事態と化した。

すると、イシカワの『作品』を美術『作品』であるとしてもいいのだろうかという疑問が生まれてくる。特に美術などという、権威的で商売に塗れた地点に留まる必要など無いのではないかと感じてしまうのだ。しかし、私達は美術というものに決別する必要など全く無い。自らが求めるものを愚直に制作し、作品が手元から離れていっても、作品が美術ではなく作品であり続けること、それを望むことだけが美術の未来を支えていくのだ。イシカワには誰に何を言われようとしても、このスタイルを貫いて欲しい。

このような動向の中でも、着々と自己の作品を造り続けている者達は多々いる。プラスチックやビニール製品を用いて現代を揶揄する者、脆弱な素材を用いて作品を神に捧げない者、工芸やテキスタイル、ジュエリーといったこれまで美術として認められていない素材を用いる者と多様に展開している。イシカワマリコはその内の何処に位置すると考えることが可能であろうか。



確かにイシカワは和紙を水彩で着色し、ドレスとバックを制作している。ここにファッションのフェイクの分野を想像することも出来るし、消費中心の現代社会へ対する儂さを読み取ることも可能だ。もしかしたら幸福感という存在しない現実に

